

——これで自由になったのだ——と、繰り返しサンボマスターのボーカルが叫ぶように歌う。

今、日本武道館のアリーナで両手を挙げ弾け飛んでいる。バケツで水を被ったように頭から汗が流れ落ちる。目に汗が入ってステージがぼやけてしまった。首に掛けたタオルで汗をぬぐってもだめだ。何度も何度も目を擦っていると目が開いた。枕の横に無造作に置いているスマホからサンボの曲がアラーム代わりに鳴っていた。

ああ、寝ていたんだと川津一仁(かわつかずひと)は思った。体中に広がっていた幸福感が一瞬で消え去る。スマホを取り上げアラームを止めた。画面に六時十三分と時間が表示されている。それを見て躊躇なくベッドから起き上がった。トイレに行き、そのまま洗面所で服を脱ぐ。洗面台の鏡に映る顔は夢の中と同じ汗まみれであった。熱めのシャワーを頭にかけると覚醒していくのが分かった。

風呂を出てリビングの壁時計をみると六時四十五分を回っていた。バスタオルを椅子に掛け下着をつける。ドライヤーで髪を乾かし、ワイシャツ、ズボン、ネクタイを締め背広を着ると七時になった。水一杯も飲まずに家を出る。会社には八時前に出社しておかねばならない。去年、勤続十年になったのを期にこのルーティンになった。ひとり暮らしのこの部屋も帰って寝るだけの場所だった。

今日は来月に新規オープンするショッピングモールでのイベント企画の会議があった。一仁が担当するのは広場で開催される催しを飾る印刷物だ。大卒で印刷会社に就職し、工場勤務を経て企画部の課長職に昇進した。印刷のなかでも特殊な印刷物を請け負うことが多く、イベント企画では立体造形物に貼り付ける印刷物を作る。素材もアクリルやビニールなど多種多様だ。一仁の仕事は納期までに仕上げさせる責任者で朝八時から夜二十二時まで働かないと対処できない環境にあり、会社の健康診断で再検査するように指示されていたがその時間が作れない。

会社は工場と併設しているビルで一階は展示場になっている。まだエントランスは閉じられており、一仁は通用口から中に入った。

保安室の職員と窓越しに目が合う。

「おはようございます。いつも早いですね」

そう言った彼は夜間勤務が専門で、このあと日勤職員と交代することになっている。

「まあ、仕方ないです。僕なんかより現場工場長はもっと大変ですから」

納期が迫ってくると工場は深夜も稼働している。

「いや、川津さんだつて深夜まで働かれていますじゃないですか」
彼は保安室から出てきて、栄養ドリンクを一仁に差し出した。
「これ、わたしの気持ちですから」と言つて笑つた。

企画部室の照明スイッチを押して中に入る。誰もいないこの部屋の静けさが好きだった。
まず自分の机に鞆を置き、椅子に座つた。さつき貰つた栄養ドリンクに貼つてある説明書き
を読んでみる。

「勇気を振り絞つて日々社会で戦っている皆様へ。体力回復や気分のリフレッシュが期待
できる、ダイナマイトな栄養ドリンク。ここぞという時に飲めばウルトラマンタロウの必殺
技「ウルトラダイナマイト」のように炎に包まれたようなパワーがみなぎってくるかも」

ラベルにそのウルトラマンタロウと思しき写真が載つていた。ウルトラマンは話でしか
聞いたことがなかったがやけに頭が大きい。一体、彼はこれをどこで買ったのだろうか和一
仁はにやけ笑いをしてしまった。

昼一番の会議に配る書類を机に並べてみた。クライアントが何度も変更事項を言つてく
るので、当初の納期までに製作するには、日程があまりにも短いことが一番の懸案だ。これ
に関しては工場長とも何度も話し合つた。ただ、このクライアントと今後の取引を考えると
先方の希望どおりにするよう社長からきつく言われている。どうしたものかと、栄養ドリン
クの蓋を取つてひと口飲んだ。

〈甘い〉

思わず顔が歪んだ。甘いだけでなく薬草の匂いが口の中で広がつた。しかし厚意を無には
できないと残りを一気に飲み終えた。

九時になるとぼつぼつと社員がやつてきた。出社時間はフレックス制だがそれぞれ自分
がやる仕事量が多いので一仁ほどではないが早朝出社と残業は常態だった。

営業企画部は営業資料を作成するのも仕事で顧客のニーズや課題を理解し、それに合わ
せた提案資料を作成する必要がある。戦略的な視点から作ることを求められているため、
士気の高い男性社員がほとんどなのだが、ひとりだけ女性社員がいる。いまその彼女が一仁
のところのコーヒークップを持ってやつてきた。

「おはよう。はいこれ、コーヒー」

彼女が体を少し屈めてコーヒークップを机の上に置く。

「おはよう。篠原さん。ありがとう」

一仁は会社の中では篠原さんと呼ぶが、プライベートでは下の名前の夕夏（ゆうか）と呼
んでいる。彼女の方がこの企画部に長く在籍しているが入社は一仁の方が三年早い。異動し
てきたときは、なぜ工場勤務の男がいきなり企画部の課長になるのかが不満だったらしく、
ことあるごとに突っかかっていた。彼女自身が上昇志向の強い人で一仁の実力を見極めて
やろうという魂胆だったと窺えた。それが一仁の実力を認めた途端、仕事を口実に彼女から

ランチや晩ご飯に誘われ出した。お互いに付き合おうと口には出したことはないが、現状を考えれば付き合っていると思う。一仁からも誘うようになったし、月に数回は食事に行き、その日は一仁の家に泊まる関係だ。

夕夏が自分の席に戻っていく姿を見ていた。ワンレンのロングヘアが緩やかなウェーブで揺れている。ブラウンのスーツスカートに同色のヒールパンプスが仕事のできる雰囲気をかもし出している。ふくらはぎが引き締まり、アキレス腱がくつきりと線を引いている。会社の飲み会の席で他の男子社員たちが、夕夏のことを仕事ができても容姿も洗練されているので、気後れして自分からはとてもじゃないが、デートに誘えない、などと言っているのを傍で聞くと悪い気はしなかった。一仁は結婚するなら彼女かなと漠然と思っているものの、いまの仕事環境では正式にプロポーズする余裕などなかった。

「おい、お前、酒が残ってんのか？ 顔が真っ赤だよ」
はっと、我に返る。

真横に立って肩に手を置いたのは同期の尾崎だった。

「いや、酒なんてこのところ飲んでないよ。そんなに赤いか？」

一仁が喋っている最中に尾崎が額に手を載せてきた。

「すごい熱いぞ。熱があるんじゃないか」

そう言うのと尾崎は書架の端に置いてある配置薬ボックスから電子体温計を持ってきた。

「測ってみろ」

差し出された体温計を受け取った。ただ、もし熱があつたら自分で分かるはずではないか。尾崎の言ったことが本当なのか自分でも額に手を置いてみた。確かに熱かった。けれど、こんなに熱いのになぜ自分には感じないのだ。

ワイシャツのボタンを外して脇に挟んだ。一分余りで、体温計から音がしたので取り出して見てみた。なんと三十九度だった。まさか、さっき飲んだ栄養ドリンクの（炎に包まれた）パワーのせいかと思つたがそんなことはあるまい。なにより、自分が体の異変を感じていないことが一番の違和感だったが、とりあえず、配置薬ボックスから解熱剤のイブを取り出して飲んでおいた。

会議の席でもクライアントから顔が赤いのが大丈夫かと口々に心配された。大丈夫です。元気ですからと言いつつ訳しながら、作業工程の調整にあたつた。納期の日延べは叶わなかったが、種類の変更を提案したのは了承された。それによつて少しだが仕上げが短くなるのだ。

「体調を心配されたことが功を奏したな」と会議のあとに工場長から誉められた。

その流れでいまからすぐに、この会社の産業医をしてくれているクリニックに行つて診てもらえと真顔で言われた。

工場長は自分のスマホに入っていたクリニックの電話番号を一仁のスマホに転送し、こ

ここで電話しろと言った。逆らえず、工場長の前で電話をした。電話を受けた女性に症状を告げると、しばらく待たされ、先生がすぐにクリニックに来るように言つてますと伝えられた。企画部に戻つて上司にクリニックに行く許可をもらうと、社員たちもそれがいいと、押し出されるような具合でビルを出た。

時刻は午後三時過ぎだった。こんな時間に外を歩くことなど、いつぶりなのだろうかと思つた。いや外には出ることはあつた。ただ自分のことで出かけることはなかったのだ。

クリニックは徒歩圏内にあつた。ドアを開けるとそこが待合室で誰もいなかった。夜の診察までの休憩時間だったようだ。受付のベルを押すと看護師が出てきた。自分の名前を名乗ると、問診票を渡された。あまり待つことなく診察室に呼んでもらえた。最初に熱をここでも測つた。三十九度は同じだった。

医師は以前の健康診断の結果の用紙を手元に置いて、

「再検査は行つてなかったのですね。正確な診断は病院で再検査しなければ出ませんが、あなたはおそらく自律神経失調症だと思います。高体温になるのは体温調節障害といつて重症化する可能性があり、特に細菌感染症に注意しなければだめです。問診票に過労だと思われることが書かれてたので、それが原因と考えられます。自宅でできるセルフケアとしては、冷却シートや濡らしたタオルで体温を下げやすい場所を冷やしたり、冷たいシャワーや入浴も効果的です」

医師から今日は早退して体を冷やして体温を下げることだと言われた。帰り際に再検査は明日必ず行くように念を押された。

一仁は命にかかわることだと医師に脅されたせいもあつて、会社の上司に電話をしてクリニックから直帰する許可と明日再検査に行つてから出社する許可ももらった。

夕夏の悲鳴で目を覚ました。

心配してくれて深夜にも構わず夕夏が家に来てくれたのだ。合鍵を渡しているのも部屋の中に入ってきたようだ。一仁はベッドで寝ていると自分では思っていたのだが、体温を下げようと水風呂に浸かったまま寝ていたのだ。

夕夏が焦った様子で救急車を呼ぶと言いスマホを取り出した。それに慌てて、一仁はよろけながら湯船から立ち上がり、

「待つて。動けるから、救急車は呼ばないで。病院には行くよ。すぐ服を着るから待つて」と掠れた声で言つた。別段、痛みや気だるさも感じなかったので一仁は疲れていたせいで寝てしまったのだと思つた。

しかし、歩いてみるとふらふらしたので夕夏に支えられながらマンションの外まで出た。すでに呼んでいたタクシーが止まつており、再検査で明日行くはずだった病院の夜間救急に行つた。クリニックで渡された診断書をみた医師は急激に体温が下がったことが気絶の原因だと言う。気絶と言われ、あれは寝ていたのではなかったのだと今になって危機感を覚えることになった。診察が済めば帰宅できると思つていたが、医師から本当に危ない状態だ

と宣告されて、そのまま入院することになった。

一仁は眠っていた。川津さんと呼ばれてもそれは夢の中のようにで意識と身体が繋がらないままだった。もう一度、川津さんとさつきより大きめの声で呼ばれて目が開いた。最初に見えたのはベッドを囲むクリーム色のカーテンだった。上を見ると天井からぶら下がる間仕切りカーテンレールがベッドを囲むように取り付けてあった。

「そうだった。ここは病院なんだ」

今日は再検査を受けてから会社に行くはずだったがこの状況を上司に電話しなければと、ベッドの横にあるサイドテーブルからスマホを探した。スマホは引き出しの中に財布と一緒に入っていた。自分でここに入れた記憶はなかった。いま着ている寝巻もいつ着替えたのか。自分の服はどこにあるのかなどと考え出すと頭が重くなってきた。一旦、考えるのを諦めて、上司に電話をかけた。

『昨夜、帰ってから具合が悪くなつて、夜間救急に行きました。そしたら、すぐ入院するように言われていま病室から電話しています。仕事のこと、どうしたらいいでしょうか』

上司に決めて貰うような言い方をした。沈黙の時間が長く感じる。もし無理にでも出てこいと言われたらそうするつもりでいた。

『分かった。なんとかこつちで対処しておく。それでどれくらい入院するんだ？』

上司は苛立ちを抑えきれないようだった。

『まだ分かりません。分かり次第すぐご連絡します』

一仁は詳しい症状は言わなかった。上司にとって知りたいことは、一仁がいつ戻ってくるかだけだと思ったからだ。

片側のカーテンが開かれた。この病室は六人部屋のようなだが、対面側の入口のベッドのところが同じように片側のカーテンが開いているだけで、窓側の一仁のベッドの二台しか使用されていない。あとの四台のベッドはカーテンが全開されている。

朝食の食器が回収されたあと、昨日とは別の医師が病室に来了。診察というより様子を見に来た感じだった。治療のことを告げると出て行こうとしたので、すみませんと呼び止めた。「あの入院は何日くらいするのですか？」

医師は戻って来て、

「クリニックからの診断書を見ましたが、まずは検査入院で一週間ですね。あとは症状の重さによって一カ月から数カ月です。それに退院したとしても自宅療養を指示することもあります。自律神経失調症だけでなく隠れた病気がある可能性も考慮に入れる必要がありますでしょう。とにかく今は緊張をほぐして、身体を休めることが大事なのでそのことだけを考えましょう」

医師はそう言うと言った。ひとりになると、ここは何科の病室なんだろうかと思った。高熱になっても自分には感じられない。つまり体温調整が出来ない身体だということ。クリニックの医師もさっきの医師も自律神経失調症だと言っていた。それがどういう病気なのかスマホで調べてみた。次から次へと読みこんでいくうち、また頭が重くなってきた。過労でおこる病気は身体だと思っていたのが、精神疾患も含まれるのだ。そうすると休職して治療が必要になると書いてあった。自分は鬱病とは無縁だと思っていた。これまで人間関係でトラブルを起こしたことはなく、悩みといえば、仕事をどうさばききるかだ。むしろ、業績を認められることはあっても上司から叱責を受けたこともない。精神疾患には当てはまらないと自分に言い聞かせた。

午後からは血液検査やレントゲンやエコーなど肅々とこなして行った。けれど頭の中は入院期間を上司にどう言いかばかり考えている。やはり現状を逐一上司に報告するべきだと結論づけた。入院期間はまだ決まっていないのでメールで知らせることにした。

『お疲れ様です。わたしの入院期間の件ですが、検査入院という形で一週間は確実にそうです。検査の結果が出て治療方針が決まりましたらまた連絡します。本当に申し訳ありません』上司から返信がすぐに来た。

『一週間だな。よし、分かった。ちゃんと治療して戻ってこいよ。それまでは部下たちにしつかりフォローするように言っておく』

しまったと思った。上司は一仁が一週間で退院すると受け取ったのだ。もう一度送り直そうかと悩んだが、頭痛がしてきたのでスマホを置いてベッドに横になった。

一仁がいたのは循環器内科の病室だった。検査結果が集計され、診察室に呼ばれたのは入院から五日目だった。循環器内科の前で一仁は心療内科でなかったことに安堵した。診察室の椅子に座っていたのは、最初に病室に来た医師だった。

「川津さんの場合、内臓疾患はなかったのですが、ホルモンバランスが崩れているのと、血管の機能不全を引き起こしています。これによって脳や心臓に影響が及ぶ可能性が考えられます。原因は身体ストレスでしょう。仕事による過労です。療養は自宅でもできますが、ちゃんと休養は取れますか。もしできないようでしたら、入院治療にしますが……」

一仁は自宅療養を選べばこれで退院できるのだと聞いて逆にびくりました。その表情を見て医師が、

「自宅療養は治ったわけではないですからね。この数日間は寝て休むことをしたので、小康状態になっただけです。もし、すぐに仕事に戻られたら、再発は必ずします。自宅療養がちゃんと出来なければ、ひと月は入院してもらわなければいけません。どうしますか？」

一仁は医師の診断を手前勝手に受け取り、もう自分は大丈夫と迷わず自宅療養をお願いした。

職場復帰初日、朝起きて、まず最初にすることは体温を測ることだった。〈三十七度〉電

子体温計はその数字を表示している。普通なら微熱でも熱があると感じるのに、寝起きなのに手足が冷えているせいでそれが無い。ゆっくりとベッドの脇に足を下ろして立ち上がった。

一週間休むだけで仕事にどれだけ弊害が出ていたか、出社してすぐに分かった。一仁の担当チームの社員たちは目の下に隈ができて彼らの方が自分より病人ぽくに見えた。

彼らと話をする前に上司に詫びに行かなければと、席を立った。上司が一仁を見てにこにこ笑っている。

「入院中ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げた。

「いや、まあ大丈夫だ。クライアントの方々もみんな心配しておられたぞ。その分も仕事頑張ってくれよ」

上機嫌の様相だった。

自席に戻ると、

「迷惑をかけてすまなかった」とチームの社員に向かって頭を下げた。

「僕らでやってみて、課長がどれほど下準備をされてたのか分かりました。一週間で退院してくれて、本当によかったです」

ひとりがそう言うのとあとの数人も強く頷くのがあった。一仁はこういう関係があるからこそ、仕事をする気力が湧くのだと思った。この日も終電近くまで仕事をした。

通用口を出る時、栄養ドリンクをくれた警備職員が受付窓を開いて声をかけてきた。

「川津さん、退院おめでとうございます。わたしが差し上げた栄養ドリンクのせいではと心痛めておったんです。でもよかったです。おかえりなさい」

一仁もあの時一瞬、同じことを思ったので顔がほころんだ。

「ありがとうございます。そんな、栄養ドリンクな訳ないでしょう」

今度は声に出して笑った。

そのとき、工場側の方から人が歩いてきた。見ると工場長だった。

「川津、もう職場復帰したんだってな。自律神経失調症だったんだろ。本当に大丈夫か」
工場長も帰るところらしく、ふたりで通用口を出た。

「実は自宅療養する条件で退院になったんですが、仕事のことが気になってしまつて」

一仁は工場長には本当のことを言った。

「俺が言える立場じゃないけど、仕事と命どっちが大事かつて話、この無理は絶対あとになつてしつぺ返しがくるぞ。そうだった本人が言うんだからな」

工場長が言った通り、彼は一仁が工場で働いていたとき、心筋梗塞で倒れた。その時救急車を呼んだのが一仁だった。心筋梗塞になる前に奥歯が痛いと言っていて、仕事が忙しく歯医者に行かなかった。あとで分かったのは奥歯が痛いのは虫歯のせいではなく、心臓の神経と奥歯の神経は同じ範囲なため、痛みが起こるのだと分かったのだ。

「はい。気を付けます」

一仁は自分で言っておきながら、仕事に戻った時点で気を付けようがない。

電車に乗るとようやく仕事のことが頭から離れていった。今日は企画部室に出社してからというものの入院した一週間のうちに溜まりに溜まった仕事の案件を処理しているときも、夕夏のことを気になっていた。入院していた一週間、夕夏は見舞いもメールもくれなかった。忙しかったとしてもメールくらい送れるだろう。他に何か理由があったのか。一仁はちらちら夕夏のほうを見た。彼女も何か話したがそうだったかふたりで話をする時間などどこにもなかった。今回の入院に至る気絶で、夕夏が見つけてくれなければどうなったことか。そのお礼をちゃんと言いたかった。明日は早く退社して夕夏を食事に誘ってみようと思った。

復帰二日目、朝一番に測った体温は三十七度だった。今ではこれが正常とみなしている。

退院してから朝にヨーグルトを摂るようにした。風呂もシャワーではなく、お湯を溜めて入るので、朝は忙しい。夕夏に今日ご飯を誘うというメールすら打てなかった。出社してから、夕夏の傍に行つて誘つてみたが、すでに先約があるらしく明日にしてほしいと言われた。そうなると、今日も溜まった仕事の片付けに残業することにした。

午後九時を回ると、企画室にいるのは一仁とあと数人だけになった。

担当しているショッピングモールの広場に置くゲート看板の製作工程を書き出していく。プリントを貼り付ける土台の製作も工場するため、他のクライアントの注文と重ならないように製作日と製作者、時間を決める。入院のせいで進行が遅れた分、徹夜作業になる。もし今日、出来るようなら一仁が製作も手がけてもいいと思った。そこで工場長に電話を入れると構わないと言われたので、企画室を出て工場へ向かった。

工場の隅で作業服に着替えて、印刷機の手操作を始めた。機械の動く音とインクの匂いがここで働いていた記憶を蘇らせる。現場から離れていたせいかわ、腕や肩が痛くなってきた。冷や汗が流れ出て、背中まで痛みが走る。その時、身体の中まで響くドンという大きな音が鳴った。それっきり真つ暗になり音も消えた。

雷か地震か。工場の電源が落ちたのだろう。痛みは感じなかった。一仁は両手を広げて手探りで物にぶつからないようにゆつくりと動いた。ドアのノブのような物に手が触れたので回してみた。ドアは開いたがそこも真つ暗だった。工場の平面図は頭に叩き込まれているが、真つ暗だと自分がどこにいるのか全く分からない。開いたドアの中に入っていくと、微かな明かりが奥の方に見えた。それが外に通じているのか、非常灯が点いているのか、とにかくそこに行けば次にどうすればいいか判断できる。そこに向かっているのだが思ったより距離があつて、近づいている気がしない。

ようやく着いたと思ったら、電気が復活したのか眩しいくらいの光が点つて明順応するのに数分を要した。目の前に見えたのは屋外で、こんなところ会社の周りにあったのかと思う広い空き地だった。地面は何も舗装されておらず、野草が生えていて、少し先は水溜まりなのか水草の群れが薄紫の花をつけて広がっている。もっと先には何人か人が立ってこちらを見ている。

「へちよつと待つてくれ。あそこにいるのは……。じゃあ、ここはあの……」

そう思った瞬間、両方の奥歯が痛みだした。これが工場長のなった心筋梗塞かと自分の胸を押える。

「いや、順番が逆じゃないのか。先に痛みを感じて、あの世界が見えるのが常識だろう」次に意識を戻したときには、この前まで入院していた病院の同じ病室の同じベッドにいた。

どうして自分がここに来たのか、循環器内科の医師から話を聞かされた。

「川津さんは工場で心筋梗塞を起こしました。印刷機に凭れかかって、呻いてたそうです。他の場所で作業していた社員さんが大丈夫ですかと訊いた途端倒れて、この時、心停止したんでしょうね。すぐ救急車を呼び、別の人が工場に備え付けていたAEDを使って心肺蘇生をしたそうです。そうしたら、再生したと。危なかったんですよ」

一仁は医師から叱られるのかと思ったが、そうではなかった。

ただ、自宅療養は無くなり、今回は三カ月以上は入院をしなければダメだと引導を渡された。

これまでは起きると、どんな夢をみていたか忘れることはあっても毎日夢をみていた。病院から戻って以来、それがなくなった。夢をみない睡眠は起きて動きだしても覚醒感がない気がするのだ。

脳が活性化していない状態で出勤の準備を整えながら、壁に掛かった時計をみる。時刻は九時十五分である。冷蔵庫からヨーグルトを取り出し食べてから家を出た。

通勤ラッシュのピークが去った電車の座席に座って鞆から文庫本を取り出した。大学時代にバックパッカーに憧れたきつかけの本を再購入したのだ。こんな時間が取り戻せるなどとは三カ月前には思いもしなかった。一仁は一旦、本を閉じるとこの三カ月の間に自分に起こったことを思い浮かべた。

心筋梗塞を起こして再度入院することを今度は自分ではなく総務部の誰かが上司に報告したらしい。会社で倒れたので総務部でこれが仕事との因果関係があるかどうかを検討するため医師のところへ何度か通ったらしい。長時間の残業とそれ以前の過労による入院も医師が説明したため労災認定がなされた。

再退院した初日、企画部の社員たちは前回とは違って一仁に寄り付かなかった。何日も休んだことで迷惑をかけてしまったからかと落ち込んでみると、上司から呼ばれて、一仁の仕事と同期の尾崎に引き継ぐように言われた。上司曰く、体調のことを慮って重責のある仕事から総務部管轄の部に異動になったのだと言われたがそれは建前だ。あれほど全身全霊をかけて働いた自分を切り捨てられるものなのかと感情が吹き出そうになるのを必死で我慢した。もちろん課長の役職も尾崎に替わられ、その日に自席から私物を持って新しい部に移

った。

もう一度本を開くことなく電車は会社のある駅に到着した。何人かの見知った顔の社員と会釈を交わしつつ会社までの舗道をゆつくりと歩く。駅から十五分かけて着いた。以前はその半分の時間で着いていたと思うのだが、医者から心拍数をあげないと言われていたので早足に歩くことはなくなった。

企画部のあるフロアは最上階の六階だったが、今は二階だ。総務部自体は三階にあるのだが二階は商談をする大小の会議室があり、一番端の部屋がCS部だ。部とはいってもひとりしかない。仕事内容は顧客をサポートすることで、具体的には問い合わせやクレーム対応、資料や見本を顧客のところへ届けることも多い。

一仁はここが追い出し部屋だということは理解している。異動を知らされたときの憤りはすぐに消えた。今度はどこまでも落ちていくようなネガティブな感情に苛まれていく。それを打ち消すために窓際のデスクの席に座り、窓から入ってくる午前の陽光を身体に浴びさせ、瞑想をするように目を瞑る。呼吸は深く吸い深く吐く。〈今を生きる〉と自分に言い渡す。約十五分、自分を整えることにしている。

それが終わると、電気ケトルでお湯を沸かしてインスタントコーヒーを淹れる。心筋梗塞と関係があるのかないのか、鼻がまったく利かない。食事でもそうだったが、匂いがしないと味もないのだ。

味も匂いもないコーヒーを飲んでいると部屋の外の廊下から聞き覚えのある声がした。企画部のとき部下だった男子たちだろう。ここで顔を合わせるのは気が引けるなど思っていると、企画部の……と……が婚約したんだって、という話が途切れ途切れに聞こえた。

「あつ、来た」とひとりが言い、その話が止まる。

「早く準備しろ」と彼らに言ったのは尾崎の声だった。

一仁は席から立ってドアの傍に行った。

彼らがここに来るということは顧客との打ち合わせ会議のはず。話し声はドアの向かいの部屋から聞こえてくる。案の定、一仁が担当していた顧客の名前が出てきた。準備が終わったのか、

「聞いてみようか」男子のひとりが言う

「婚約されたんですよね」別のひとりが尋ねた。

「えっ何」尾崎は最初はぐらかそうとしたが、みんな知ってますよと男子たちが言う、「そうだよ」と尾崎は認めた。

〈ほんとか、それはお祝いいないと〉と一仁が思っていると、

「相手は夕夏さんですよ」と男子のひとりが言った。

〈夕夏……〉

一仁の頭はショートしたみたいに脈うつ痛みにも襲われた。

夕夏とは心筋梗塞の入院以来、お互いに連絡を取り合っていなかった。最初の入院の時と同じく見舞いもメールも来なかった。一カ月経っても来ないのは夕夏に気持ちが無くなっ

たものと諦めた。このまま自然消滅するだろうと思っていた。しかし、課長職についた尾崎と結婚するのは乗り換えられたとしか思えない。

「もう三年も付き合ってるからな。年貢の納め時ってやつだ」

尾崎が言ったのを聞いて、思わず声をあげそうになった。中にいることが知られないよう、ゆつくりとドアから離れて窓際の席に戻った。

もう一度、目を瞑り、瞑想のように深い呼吸をした。

〈横入りをしていたのは、知らぬとはいえ自分の方だったのだ〉

感情の塊が口から出ていくように大きく息を吐いた。泡立つような感情は消え、諦念を抱く思いで、デスクのうえで冷たくなったコーヒーの残りをひと口で飲み干した。

窓の外に目をやる。陽が高くなつてくると街路樹の枝葉が道路に影を刻む。風に揺らぐ影を見てみると、もう夕夏のことともこれでよかったのだと思えてきた。尾崎に仕事や役職を取られたときも同じように諦めは早かった。手元にある空のコーヒーカーップに視線を移す。匂いも味もないというのは、執着も取り払ってしまうのだろうか。

ここに異動して企画部の何人かが食事に誘ってくれた。心配してのことだと思ったが、食事をしながら話をしているときは彼らの顔の中に〈落ちて行った者〉の苦渋の声が聞きたいという気持ちが見えてしまった。けれどそのときも一仁に感情の起伏が起きなかったのは、口の中にいれた焼き鳥から味も匂いもしなかったからかも知れない。

パソコンを立ち上げて、ようやく今日の仕事のスケジュールを確認する。新規顧客の会社に資料を持つていくことになっている。会社のホームページを開く。その会社に必要となる資料の選択と色見本帳をどれにするか考える。以前の仕事はここからが本番だが、今の仕事はここまでで終わる。資材室から見本サンプルと資料に必要なものを印刷し、会社の住所を確認した。一仁の会社のあるM駅からだと電車一本でD駅に降りれば歩いてでも行けそうだ。会社のビルの前がY神社なので迷わず行けるだろうと思った。

D駅で降り、駅の壁にかかっている地図を見た。大通りを南に進むとY神社があった。安心して、資料と色見本帳を入れたトートバッグの持ち手を肩にかけ、歩きだした。この駅で降りたことがなかったが、寺や神社が多く、民家や雑居ビルがその外回りを囲む形で建ち並んでいる。ひとつ先の駅は仕事関係で何度か行った官庁街とライブ会場があるお城公園の最寄りでこの駅とは雰囲気が多々違った。

ゆつくりと歩いても十五分ほどでY神社の鳥居が見えた。手前の道を曲がれば目的の会社の入っている雑居ビルがあるはずだ。曲がつてすぐに目に入ったのは、大きなカゴ台車に土の塊を載せて押している男性だった。道が少し登り傾斜しているからか、男性の歩は一向に進んでいなかった。一仁は彼の横に並ぶと顔を見た。頭をさげた姿勢だったので後ろからでは気づかなかったが、彼は白髪の老人だった。普段着と思っていた紺色の服は作務衣で一仁に見られていることに気づくと、にっこりと笑った。

「手伝いましょうか」

彼の笑った顔が屈託のない無邪気さだったためか、返事より先に手を伸ばした。

「ありがとう。ありがとう」

彼はそう言うで一仁の背中をさすった。

台車はかなり重たかったが、傾斜を乗り上げると、そこからはするすると動き出した。

「申し訳ないが、ここに入ってくれるか」

少しすると、ビルの前でそう言う。ビルの壁面看板を見ると、そこが顧客の会社がはいっている雑居ビルであった。彼がここ、と言ったのはビル入口横の地下へ降りるスロープのことだった。わかりました、と返事をしてスロープをゆっくり進む。地下駐車場かと思いきや、下まで行くと、大きな鉄の扉があった。彼が扉を開くと倉庫のような広さで、真ん中に大きな作業テーブル、奥の方には銀色で四角くて大きくて台脚付きの厨房機器のようなものがある。壁一面に棚台が並び、そこに昭和の頃、各家の玄関に付いていた牛乳箱のような形の陶器の器がたくさん置かれている。

こんなに広いスペースのところなのに人は誰もいなかった。見回したところ、会社関係の作業場とも思えなかった。物づくりの工房で作業衣を着たこの白髪の老人が何かの専門分野の職人か一仁が知らないだけで巨匠なのかも知れないと彼の方をみた。

「ありがとう。ありがとう」

彼はまたお礼を繰り返した。

「どこに置きますか？」

一仁は台車の上の土の塊を指して、訊いた。彼はパンパンと作業テーブルを叩き、ここだと言った。土の塊はネズミ色の粘土のようにも思えた。透明のビニールに包まれた塊は全部で一〇個もあった。ひとつが一〇キロはあるようなので一〇〇キロかと。全部を作業テーブルに載せ終えると、両腕を大きく打ち振った。

「どうもありがとう。だいぶ腕が疲れただろう」

老人は作業テーブルに置かれたひとつの土のビニールを引き外しながら言った。

「いえ、大丈夫です。それじゃあ、僕はこれで……」

作業を始めそうだったので、ここから出て行こうとした。

「それじゃあ申し訳ない。いま、ゲンノショウコウを薬缶で煎じているので、飲んでいきなさい」

ゲンなんとか？ 薬缶で？ 何のことかと戸惑っていると彼はお盆に載せた湯吞茶碗を持ってきて一仁の前に置いた。それに目を落としていると、もう一度押し出した。これを取れということなのは分かっていたが、ゲンなんとかというのが何なのか分からない以上飲むのが躊躇われる。その気持ちが分かったのか、

「薬草茶だよ。腸を丈夫にするので、わたしは子どものときから母親に飲まされていたんだよ。心配ないから飲みなさい」

それを聞いて湯吞茶碗を取った。口元に近づけても、もちろん今の一仁には匂いはしない。

色は淡い黄緑色をしており、口に含むと味はしないものの、口の中の粘り気がさつと持ち去られた。

「見たところ、君も腸が弱そうに思えたから」

そう言つて自分も湯呑茶碗を傾けた。

「あれは何ですか？」

薬草茶を飲み終えたところで、壁際に並んだ牛乳箱みたいなものが何なのか老人に訊いてみた。

「ポタリーケース」

え？ また今度は何て？ 聞こえるのに意味が分からないことが続いて再び戸惑つてしまう。

「ところで、君はサラリーマンだろ。趣味はあるのか？」

ないですと答えると、今日、仕事が終わったら何時でも構わないのもう一度ここに来なさいと言われた。

「ここは何をするところなんですか？」と訊いた。

「見ての通り、陶芸だよ」

老人はにつこりと笑つた。

一仁はお辞儀をして作業場から出た。行くとも行かないとも言わなかったが、彼も返事を待っているふうでもなかった。

スロープを登つて外に出る。すぐ横の雑居ビルの玄関口から入り、エレベーターで今日資料を届ける会社のある階に上がった。担当者と資料の説明をしたあと、地下のスペースは何なのか尋ねてみた。その担当者は地下に何があるのか知らないと言つた。

会社に戻り、訪問した新規顧客が今後どのような発注をするかなどの、今度は営業担当者に渡す資料をパソコンで作つていた。

遅めの昼ご飯を食べた後なのにもう空腹だった。いつもなら膨満感が続いているのにどうしてなのかなと思つたときに、今日飲んだ薬草茶のことを思い出した。こんなに効用があるのなら名前をちゃんと聞いておけばよかったと思つた。

定時退社の午後六時になった。

ドアの向こうでまた企画部の後輩たちの声がしたと思つたら、ノックすると同時にドアを開けて、三人が入つてきた。

「川津さん、ビッグニュースですよ」

一人目が言つた。すると、

「違うだろう。まず、体調はどうですかつて訊かないとダメじゃないか」

二人目が言う。

「体調は大分よくなつたよ。それで、ビッグニュースってなんだ」

一仁は答えた。

「それはよかったです。それで、ビッグニュースはですね、尾崎さんと夕夏さんが婚約されたんですよ。それで今日、ノー残業デーなので、男子だけで尾崎さんを囲む会をしようって話になりました、川津さんをお誘いにきました。尾崎さんと同期だし、仲もいいから是非参加してください」

三人目が言うと、あとの二人が頷いた。

「川津さんはお酒飲まなくていいですから。ご飯だけ食べてください」

一人目がすかさず、付け加えた。

「ええっ、尾崎と篠原さんが」

ドア越しに彼らが話していたのを聞いて知っていたことは、おくびにも出さず驚いたふりをした。

「でもなあ、これから先約があつてなあ。行きたかったけど、ごめんな」

一仁は後輩たちに差し障りのないよう断った。

約束などなかったが、昼間の老人のところに、さつと顔だけ出せば嘘ではなくなるなど思った。三人が部屋から出て行くと、一仁も行こうと決めた。仕事の一線から外され、自分では恋人と思っていた女性から去られた今、これ以上失うものはないのだと一仁は自分に言い聞かすように物思いに耽る。

デスクの上を片付けながら、窓の外を見た。さつきまで明るかった空がもう赤く染まっている。気温はまだまだ高いが秋を感じさせる空だった。企画部にいた頃は、街路樹をじっくり見たことがなかったが、葉の形は紅葉と同じなのだが直径が一〇〜二〇センチと相当大きいことに気づいた。調べてみたらタイワンフウという樹木だった。あとひと月もすれば真っ赤になるだろう。

雑居ビルのある駅に着いたときにはすっかり暗くなっていた。大通り沿いの舗道は幅が広いが、この時間帯は家路につく、様々な人で混みあっていた。昼どきは、車の往来以外、まったく人がいなかったのと同じ場所とは思えなかった。神社の近くまで来るとライトアップされ、大勢の人が鳥居をくぐって行く。何かの祭りかと前まで行ってみたが、屋台があるわけでもなかった。入口の掲示板に秋祭りのポスターが貼られてある。それによると、まだ先の十一月だ。

道を戻って雑居ビルのある筋に入った。ビルの窓に灯りが見えるのは数カ所で、ビル自体がシンと静まり返っていた。地下に降りるスロープのところには照明がついていたが、鉄の扉は閉まっていた。チャイムもないので帰ろうと思った。そこで後ろを振り向いたとき、スロープの上の方からあの老人が降りてきた。

「来たな」

老人はどこから来たのだろう、そして一仁の来たことがどうして分かったのだろうと不思議に思った。

一仁は笑いながらお辞儀をした。老人は大きな鉄のドアにこれまた大きな鍵を差しこん

で扉を開いた。暗闇の方から一瞬、何かの匂いが鼻先に触れた気がしたが、そのあとで何度か鼻を嗅つても匂わなかった。

照明が点き、作業テーブルのところまで歩いた。向かい合つて椅子に座るやいなや、

「ここであたしの作業を手伝つて欲しい」と言つた。

「作業ですか？」

陶芸工房だということは分かるが、老人が〈作業〉という仕事めいた言葉を使ったことに違和感がある。

しばらく沈黙が続いた。老人から話し出す雰囲気ではなかったので、

「どうして今日会つたばかりの僕を〈作業〉に誘われたのですか？」

老人はどう言おうか迷っているように見えた。やがて、真つ直ぐに一仁の顔を見て、

「君の社章がね。十年以上前になるかな。君と同じ会社の人がこのビルの会社に来たことがあつた。その人はこのビルの非常階段から飛び降りようとしていたのをわたしは止めたんだ。けど結局は別の場所で……ね。君の会社と取引があるテナントの人も一緒に引き止めたのでそのことを教えてくれた」

「僕もその人のようになると？」

自分でもなぜこんな普通に受け答えしているのかと混乱してきた。

今だけではない。三カ月入院して会社に戻れば追い出し部屋に入れられたのに、怒る気になれなかった。そのときも思ったが健康を害すると、競争心は摩滅してしまうものなのだと。

「その人はリストラの宣告をされたのでしょうか？　僕はまだリストラ指名はされてませ

んが、時間の問題であるのは間違いないでしょう」

老人が助けの手を出していると思つた。

「わたしは利他的な人間じゃない。ここでもどうしても仕上げてしまいたい作業があるのだが、この歳ではひとりでは遅々として進まない。今日、君が土を運ぶわたしに手を貸してくれた。だから頼んだ。社章を見て、昔の彼のことを考えはしたが、それは色見本を届ける部署なら時間が作れるだろうと思つたからだよ」

「それにもうひとつの理由は、君、鼻が利かないんじゃないか？」

老人は自分の鼻先を指で摘まんで揺らした。

「えつ、ここは臭い所なんですか？」

思わず、失礼なことを言つてしまった。

「ハハハ、臭くはないさ。昼にゲンノショウコウを飲んだらう。あれにはタンニンが多く含まれているので、渋くてわずかながら、特異な匂いがある。君は飲んだとき全然表情を変えなかった。味がしてないんだと思つた。味がしないのは鼻が利かないから」

見事に一仁の現状を当ててくれた。

「鼻が利かないことが誘う理由ですか？」

「それも違うな。けれど体が壊れるときというのは、これまでの生き方を転換させられるときでもある」

一仁の場合、鼻が利かないことより心筋梗塞で死にかけたことの方がそれに当たる。

「鼻ではありませんが、病気がこの仕事に就く原因でしたね」

老人はにやりと笑うと、

「いや、君からは負の波動は感じられない。今は身弱の時期だと思うが君の本質は活発なはずだ。この時期を慎重に潜り抜ければ、よい生き方ができる」と言った。

この老人は四柱推命の鑑定士なのかと思うほど、朗々と語るではないか。

老人は一仁がまだ作業を手伝うとも言っていないのに、作業場の説明を始めた。一番奥にある銀色の大きな厨房機器だと思っていたのは陶器を焼くガス窯だった。「ポタリーケース」と言っていたのは、和訳すると「陶器製の小物入れ」ということだった。

「何を入れるための物なんですか？」

壁際の棚台にあるポタリーケースを眺めながら訊いてみた。

「興味が湧いてきたかな。それは追々分かるよ。君に手伝ってもらいたいのは、タタラ作りと言って、粘土を板状にして切ってもらいたい。明日、わたしがレクチャーするので、会社帰りに来て欲しい。服は、背広スーツじゃ汚れるのでTシャツにジャージでも持つてくるといい。エプロンはここにあるから」

老人はブリーフィングは以上と言うと陶芸工房から出て行こうとした。一仁はここに残されては困ると、慌てて後を追った。老人は振り向くと「電気を消して戸締まりをする」と作業テーブルに置かれている鍵を指さした。

一仁は「はい」と言って戻り、鍵を持って戻った。「電気のスイッチはそっち」と壁に指を指されると、そっちへ走って電気を消した。鉄の扉を閉じて鍵を掛け終わると老人に鍵を渡そうとした。

「それは合鍵だから持つておきなさい」と押し返された。

手にした鍵を見ていると明日から手伝う実感が湧いた。不思議な人だが興味深い人でもある。大通りに出ると神社のライトアップは消え暗く静まり返っているが、一仁の体の中が躍動しているのを感じる。しばらく歩いていると、一仁は老人の名前を訊くのも自分の名前を名乗ることも忘れていたことに気づいた。似た者同士なのかと口角が上がる。明日からの作業が何となく楽しみでもあった。

中村敦君が彼の母親と並んで中学校の廊下を歩いている。正門に続く校舎の出入口にさしかかったとき、中村君は振り返って一仁に笑いかけた。仲が特別よかった訳でもなく、同じクラスだったのは小学校の時だけで、一仁も中村君からも話しかけてくることもなかった。一週間後が卒業式だ。中村君は三年になってすぐに病気で入院をした。今日が久しぶりに学校に来た日だった。中村君が着ている制服はぶかぶかで、それは病気でやせ細ってしまったからだ。

昨晚、衣装ケースから取り出したジャージズボンが中学のときの物だったから、こんな夢をみたのだろうか。現実では卒業式の前日に中村君が亡くなったことを聞いたのだった。出勤前に仕事鞆にしているリュックの中にTシャツとジャージズボンを詰め込みながらそんなことを思い出していた。

C S部の部屋に入ると、すぐにドアがノックされた。席から立ち上がって行こうとするとドアが開いて、尾崎が入ってきた。

「おお、どうだ」

尾崎は部屋を見回しながら一仁のところへ近寄ってきた。

「おめでとう。篠原さんと婚約したんだってなあ」

一仁はどうして尾崎がここに来たのか分からないながら、婚約のことは知っていると伝えた。

「お前、俺のこと、怒ってるのか？」尾崎は直截に問いかけてきた。

黙っていると、

「昨日、あいつらが誘いに来た時、予定があるって断ったんだろ。そんな約束、本当はなかったんだろ」

当たらずとも遠からず、ではあったが、

「何とでも思ってくれ。けどな、今、自分がここにいるのは誰のせいでもないって、分かってるよ。アスリートが怪我をしたら選手生命が絶たれるのと同じことだ。尾崎のことは同期に変わらないよ」

尾崎はそれを聞くと、ほつとしたような顔をして、間をおかずに、一仁が担当していた会社のことについて立て続けに質問をしてきた。それに対して、一仁は自分の分かることは全部答えた。尾崎も担当して大変なのだろう。一仁が顧客の信用を得てきたのは、結局は自分の時間をすべて仕事につき込んできたからで、そのせいでここにいるのだから。

結婚式には呼ぶから絶対に来いよ、と尾崎は部屋を出る時に言った。夕夏のメンタルなら自分が行っても動じることもないだろう。

尾崎が出ていくとひとりの部屋に戻った。窓を開けていると、顔を撫でるような緩い風が入ってきた。デスクから外を見るとタイワンフウの枝に白黒の見たことのない鳥が留まっている。白黒のカラス？ そんなものがあるのか知らないが、スマホで拡大写真を撮ってみた。なぜか浮き浮きした気分だ。こんなことこれまでに一度もなかったなど、パソコンを立ち上げた。今日は内勤の仕事しかないので、昼前には予定していた仕事を片付け、各部署にメール添付して送った。

昨日、老人から「壊れるときは、これまでの生き方を変更するときでもある」と言われたことがきつと影響しているのだ。「これしかない」と生きていたときよりも受動的ではあるが別の生き方が何なのか、この先を知りたいと思う。

鞆のポケットからコードレスイヤホンを取り出して耳に付けた。スマホのアプリからミュージックのアイコンをタッチする。学生時代に聴いていたサンボマスターのアルバムを

再生した。続いて電車の中で読んでいた文庫本を鞆から取り出した。沢木耕太郎の深夜特急1の読みかけのページを開いた。二章の黄金宮殿・香港だ。安いチケットで目的地に直行するのではなく、ストップ・オーバーができるということで香港にも立ち寄るチケットに作り換えてもらったところだった。今の香港とは状況が違うだろうから同じ旅はできないかもしれないが、この作者の旅をトレースする人生を一年、いや、三年くらいできたらどうだろう。そんな資金はどこにもないとあの頃は諦めていたが、今ならある。けれどまだ、飛び出す何かが足りない気がした。

定時まで本を読みながら過ごした。仕事を与えられず、これまでの関係を断ち切られて、どこまで居続けられるのか。音楽を聴いたり、本を読めるということはそういうことだ。深夜特急1を全部読み終えたので、片付けて部屋を出た。

作業倉庫に着く。鉄の扉の鍵を開けると老人はすでに中にいた。

「こんばんは。お疲れ様です」

一仁は老人に近寄りながら言った。

「お疲れ」

老人は団子状の陶土を上から押し込むように練っていた。

「着替えはどこでしたらいいでしょうか？」

リュック鞆からジャージを取り出して訊いた。

「ほら、あそこ、エプロンが掛けてあるところ、わかるかい？　そこに脱衣かごが置いてあるだろう。そこで着替えて」

老人の手元を見ていると、左手で土を持ち上げて、右手で端を押さえる動作を繰り返している。手の形が土に刻まれる。少しずつ位置をずらしているので手形が順番に追加されていく。どこかで見た気がすると思っただけなら、そば打ち師がそば粉に水を加えて麺にしていくなかに動画をテレビで見たことを思い出した。

棚台の一番奥の柱にエプロンがかかっている。脱衣かごはその下にあった。ジャージに着替えたところで靴を持って来なかったことに気づいた。すると、離れたところから、

「脱衣かごの傍につっかけサンダルもあるだろ。それを履きなさい」と土練りを続けながら言ってくれた。助かる、と無言で感謝をし、白いタオルを頭に巻き、恰好だけ職人ぽくなつた姿で老人のところに戻った。

「その『中』っていうのは何だい？」

Tシャツの胸元にデザイン文字で『中』と印刷されているのを見て質問された。

「中学のときの体操着で、この文字は学校の校章です」と説明した。

老人はそうかいと言うと、こつちに来なさいと手招いた。

作業テーブルの上にはさっき練っていた陶土の他に三十センチほどの木片が数十本と持ち手の部分がある麵棒のような物が置かれてある。一仁が隣に並ぶと、老人は陶土を真ん中に木片で挟み、左右同じ本数の木片を重ねて置いた。

「まず、この延べ棒でタタラ板と同じ高さになるように伸ばす」

そう言うと、延べ棒を陶土の上に載せて押し引きした。持ち手部分の木が芯になっていて、真ん中がロールのように回転して土を伸ばしていく。数分もすると、タタラ板と同じ高さまで土が下がった。上下の端を叩いて調整するのにB4サイズの厚紙を載せて長方形に整えた。

「そしたら、これで一枚ずつカットする」

両側に小さい木片がついた針金のようなもので一番上に重ねていたタタラ板を左右から一枚取り除き、奥の方から土に針金を食い込ませた。二番目のタタラ板に沿わせて手前に引いてくると、二センチほどの厚さの長方形がペロリと剥がされる。

老人は土を練って渡すので、今みたいに延ばして切ってくれと一仁に言った。小一時間で三度、練った土を渡され、一仁がタタラ板の作業をした。

テーブルに長方形の土の板が十数枚置かれているのを見ると、達成感が湧いてきた。

「これで終わりじゃないぞ。さっきの厚紙を土の上に載せて、この粘土カッターで四辺を切る」

渡されたのはたこ焼ピックみたいなものだった。言われたように一枚ずつB4の厚紙に合わせて四辺を真っ直ぐにカットしていく。その横で老人は屋根部分を切り取っていた。それが済むと、土を混ぜた泥水で陶板の端を針先のついた道具で凸凹にした場所を湿らし別の陶板と繋ぎ合わせる過程を教えられ、ふたりで作業する。適度な湿りを残した陶板がポタリーケースへと姿を変えていく。全部で五体のポタリーケースが仕上がったのは十時少し前だった。

両手の爪の中まで土が入り、乾いて白くなっていた。作業をしているときは何も考えることなく土を触る。一仁はこんなに何かに集中することなど久しくなかった。

「君にはこの作業が合ってるな」

老人はそう言うと、湯沸かし器の付いたシンクを指して、手を洗ってきなさいと言った。シンクの横のカセットコンロの上には沸騰しかけの薬缶が載っている。これはまた、ゲンなんとかという薬草茶に違いない。今日はちゃんと名前を訊いて覚えておかねければと思った。

「遅くなったが、ここで飯を食べて帰りなさい」

老人は片付けた作業テーブルの上に白木の弁当箱を並べていた。

「これ、作られたんですか？」

作業テーブルに戻してみると、使い捨ての入れ物に見えない弁当箱だったので訊いた。

「作らないよ。行きつけの料理屋に頼んで作ってもらった。それはそうと、君は勘もいいし、わたしのしている作業を全部覚えられると思う」

気に入ってもらえたのは嬉しかった。

「僕も楽しかったです。今の部署ならお手伝いできます。けれど、言っていましたように、いっつリストラ指名がくるか分からないので、そうなれば転職先を探さないといいけません。もし

ちゃんとした後継者をお探しなら僕は当てはまりません。明日、リストラになるかもしれないね」

冗談めかしに大仰な笑い顔を作った。

「それは構わないよ。来れるときまで、来てくれたらでいい」

老人の方は最初に出会ったときと同じ屈託ない笑い顔を一仁に見せた。

「じゃ最初にビジネスライクなことを決めようか。ここでの作業はまったく何の利益も得られない。ポタリーケースは売りもんじゃないから。君、そうだ、君の名前を聞いてなかったな」

返事を待たれていると思ったので自己紹介をすることにした。

「僕はカワツカズヒトと言います。三本川に三重県津市の津、漢字の一に仁義なき戦いの仁と書きます。歳は三十三歳でまだ独身です。ええっと、それから仕事は印刷会社で事務方の仕事をしてます。はい」

一仁が言い終えると、

「わたしはミワテツジ。漢字の三に輪つかの輪、哲学の哲、慈悲の慈。歳は八十歳。仕事はビル管理人でビルオーナーをしてる。わたしも独身だ」

やっぱりと一仁は思った。だからビルの地下倉庫を自由に使えるのだ。

弁当を食べながら、お互いをどう呼び合うかなどいくつか候補を出した。一仁の事はカズと呼ぶことですぐに決まったが、一仁が社長と呼びますと言うと、それはダメだと拒否された。自分のことをテツと呼べと言われたが、それは勘弁してほしいと一仁が拒否したので、なかなか決まらなかった。最後にテツさんでどうですかと一仁が言うのとそれがいいと頷き決まった。

「カズ、それではここには平日の午後七時に来て、作業して、こうして晩飯を食べて帰るということで、一日一万円を報酬としてあげよう。それで構わないかな？」

「晩ご飯はありますが、報酬はいりませんよ」と断った。

「こういう取り決めは最初をやっておいた方がいいんだ。タダ働きは絶対してはダメだ。当人同士に悪意がなくても、後々それがきつと問題になるだろうから」

テツさんは頑として聞き入れなかったので根負けして了承した。

一仁は家に帰ってから、浴槽にお湯を溜めて浸かった。入る前に測った体温は三十六度五分と平熱に戻っている。ストレスがないからか身体は心地よい疲労を感じていた。鼻は相変わらず利かないが、作業場で食べたお弁当は美味しいと感じた。そういえば、またゲンなんとかという薬草茶の名前を聞き忘れた。弁当の中身は煮魚と出し巻、小芋とまるこんにゃくの煮物など家庭的なおかずだった。ひと口食べたあとに薬草茶を飲むと鼻の奥のほうからうつすらと茶の匂いがした。やはりあの薬草茶は身体にいいのだろうと思った。腸が弱いというテツさんも痩せすぎず筋肉質な体格を維持している。健康とは関係ないが、テツさんは身長こそ一六〇センチあるかないかだが頭髮は真っ白でぎつしりと毛量がある。一仁が子どもの頃に観た大河ドラマの主人公をしていた俳優に似ていて、目鼻立ちは彫りの深い顔で

ある。テツさんは若い時はさぞかし男前だったと思う。

食事中にテツさんが「やつぱりよく似てるな」と言って一仁の顔をじっと見つめる時があった。「誰に似ているんですか？」と聞くと「兄貴」と答えた。「お兄さんはテツさんに似ておられるのですか？」と訊くと、似てるよという返事が返ってきた。一仁はそれが嬉しかった。自分は家族の誰とも似ていない。弟は父とそっくりだと言われていたが一仁は親戚まで対象を広げて誰にも似ていなかったのだ。まさかそれが原因とは思わないが一仁は家族との関係が希薄だった。仲が悪かった訳ではないし、別にそれが不幸だとも思っていないかったのだが、テツさんとはこれから親密な関係になることを厭わない自分がいる。しかも出会ってそんなに時間が経っていないこと考えると、自分にも人に愛されたいという欲求があるのだと思い、さすがに照れくさくなった。それを誤魔化すように湯船に深く浸かっていった。

いつもの時間に出勤してCS部に入ると、そこに上司がいた。これは引導を渡しにきたのだと思った。

「おはようございます」

一仁は平常心を保ったふりをして席に着いた。

「体調はどうだ」

上司はデスクの前に来て尋ねた。

「体温は正常に戻ってきたようですが、まだ不安があります」

このあとにリストラと言われるものだと思うって待ち構えた。

「そうか、体温は正常になったか。だったら企画部に戻ってきてくれないか。お前に替わって尾崎が担当した案件がどれも進まない。お前を外に出したのは間違いだったわ」

上司はそう言って苦笑いをした。

〈戻る？〉

まったく予想もしなかったことを言われ、頭が真っ白になった。

固まったまま上司の顔をみると、上司は一仁が喜ぶだろうと思っているのか、顔がほころぶ時をいまかいまかと待っている風だった。

〈なぜ今なのか。本当に僕のことを評価してくれていたのなら、三カ月入院したあとも企画部にいさせてくれたはずじゃないのか。健康状態が戻ったから戻す？ あそこにいたときのように働けば、また体調は悪化するに違いない。それを考慮に入れていない訳がない。それとも、この上司は軽薄なのか〉

「痛み入ります。是非お願いしますと言わなければいけないのですが、一日だけ返事を待って頂くわけにはいけませんか？」

上司の顔が一度、素に戻り改めて柔和な笑顔をみせた。

「わかった。それじゃ明日な。席を作って待ってるぞ」

午後七時に作業倉庫に行くとテツさんは昨日と同じように土を練っていた。

一仁はジャージに着替え、作業テーブルについた。

「今日、上司から前の部署に戻って来いと言われました」

テツさんに相談するのは自分の思惑があっているかどうかを聞き出すためだった。

「ほう。どういう訳でそういう話になったんだ？ カズが戻りたいと懇願していたのか」

テツさんは手を止めることなく質問してきた。

「いいえ。僕が受け持っていた案件がどれも進まないからです。外に出したのは間違いだつたと」

上司が言った通りのことを伝えた。

「カズはもう答えを出しているんだろう。わたしが戻れとか戻るなという意見が必要な訳じゃないな。だから、これから言うのは想像の範疇だからそう思っただけ聞いてくれよ。」

その上司は頓挫しそうな案件を先方が抗議できないような理由付けでチャラにしようとしているな。カズが担当に戻る。恐らくは今更どうしようのないくらいの失態がある。上司は解決ではなく責任をカズに被せたいのだと思う。

カズは責任を取って会社を辞める、それくらいじゃダメだ。つまり命を差し出さねば終わりは来ない。わたしはそういう会社をいくつも見てきたからな」

一仁はこくりと頷いた。

「何もかもテツさんの言われた通りです。僕もなぜ今なのかと考えました。テツさんには言ってますでしたが、僕は心筋梗塞で一度心停止しました。過労で倒れて、自律神経失調症と診断されました。一週間検査入院して医師からは一カ月は自宅療養を命じられましたが、担当していた仕事が気になり、すぐ会社に戻った。その数日後に心筋梗塞です。」

次また、戻って残業ばかりしていれば、脳にくるか心臓にくるか、どちらにせよ過労死すると思います。

僕が思うのは、命を懸けてもいいと思えるかということです。誰のために？ あの上司のためかと思うと躊躇します」

「そらな。やっぱり答えは出ていたな」

テツさんはそこで手を止めて、一仁を椅子に座るよう合図した。テツさんも椅子に座ると、「カズは着実に変化をしてきているよ。病気になる前は〈死〉を考えながら生きてなかっただろう。けど、今は考えている。それも保身のためじゃない。さすがに心停止していたとは思わなかったが、カズは〈死〉と〈生〉が決して別の世界じゃないことを知っている。そんなカズをここに勧誘できてわたしは本望だ」

テツさんの方が一仁の立場が見えていたということか。副業でこの手伝いをするつもりが専業になるか。いや違うかもしれない。もう一つ副業を持って、この作業をつづければいい。ここでテツさんと作業する楽しみができたから、会社を辞めることができるのだ。

「さあ、今日から全行程をひとりでも出来るように教えていくぞ。ほら、こっち」

いつものテツさんに戻った。

「土練りはな、まずは塊を押しつぶすように両手で上から押さえつける。伸びてきたら折りたたむ。で、また押す。やってみなさい」

一仁の前に四角い陶土が置かれた。

土の中に掌が沈み込んでいく。押して折る、を繰り返していると土の面密度が増していくように思えた。

「これは何のための作業なんですか？」

「中の空気を抜くんだよ。土の中に空気が入ってたなら、ひび割れたり、形が変形するから。よし、それはもうそれでいいわ。次はこれだ」

テツさんはそば粉を練るそば師の仕草に変わった。

「これは菊練りと言って、土が菊の花のような形に見えるだろ」

これも土から空気を抜く作業だとすると、なぜ二つのやり方をするのだろうと思ったが、自分が菊練りをやり始めるとテツさんのように均等な折り目がついていかない。これは相当難易度が高いぞとゆっくり手を動かしていると、

「心配しなくても、土練り三年といつて、ちゃんとできなくて、当たり前なんだ」

最初の土練りを荒練りといい、菊練りは作陶前に完全に空気を抜くための作業だと教えてくれた。

最初は荒練りを丁寧にするればいい。そう言われても早く出来るようになりたくて、テツさんの菊練りをじつと見ていた。右手と左手の動きが連動して、どこにも余分な力が入っていないように見える。それを十五分ちかく繰り返す。最後は片方を先細くしていき、出来上がりの形をみると砲弾のように円錐形に仕上がっていた。

今日も無心になって土と向き合った。タタラ板からポタリーケースを五体仕上げることでできた。そういえば前回作ったポタリーケースはどれだったのかと、壁に連なる棚台を見ていると、色の違いに気づいた。ある物は土が乾いた白っぽいネズミ色でもう一方は肌色をした明るい物だった。

気がつくともテツさんの姿がなかった。手を洗いにシンクの所に行くとコンロに薬缶がかけてあった。傍に茶袋が置いてあり、ゲンノウショウコウとカタカナ表示がされていた。これで名前が分かったぞと、ポケットからスマホを取り出して茶袋の写真を撮った。鉄の扉が開いてテツさんが弁当を持って帰ってきた。一仁がコンロの火を止めて作業テーブルに薬缶とコップを運ぶ。

「ゲンノウショウコウを飲んでから体調がいいです」

一仁はコップに注ぎながら言った。

「まだ鼻は利いてないんだろ」

テツさんはまた言い当てた。

弁当を一仁に手渡すと、今日は鰻ご飯と山菜の天ぷらだと言った。

「ここからいい香りが漂っているんですか？」

弁当を鼻に近づけて訊いた。

「カズの鼻はちゃんと元通りになるから心配しなくていい。治るのは故障したときの倍の時間がかかるものだからな。これからは身体の言うことを無視せず、ちゃんときいてあげなさい」

そうなのか。確かに治る時間が倍かかるというのは合点がいった。だが、身体の言うことをどうやってきけばいいのかは分からなかった。

話し終わったあとのテツさんはリラックスした様子だったので、さつき疑問に思った、ポタリーケースの色の違いを訊いてみようと思った。

「それはスヤキだよ。明日、生を焼くから。ガス窯のことを教える。ところで、会社はいつまでだ。仕事がここだけになったら、十二時から十九時までにしようと思う。それでこうして、一緒に弁当を食べておくれ」

スヤキが何のことかは分からなかったが、明日の誘いには喜んで承諾した。

ここだけの仕事になったら、一日の報酬を一万五千円にするとのことだった。作業するのは平日のみで土日と祝日は休みだ。一仁はテツさんの提案に素直に頷いた。もうひとつ副業を持てば、会社を辞めたあとの生活も大丈夫だろう。いまは作業の一部しか知らないがそれは不安ではなく期待の方が大きかった。

出社すると直接企画部の上司のところへ行った。

企画部の社員たちがざわついている。尾崎に視線を送ったがさつと顔をそらされた。夕夏を目で探してみたがいなかった。夕夏には自分は何も思っていないこと、夕夏たちの結婚を祝ってあげられるという気持ちを伝えたかったのだが。

上司の前に来た。

「昨日の返事を持って参りました。僕自身はここに戻って、またみんなと働きたい気持ちでした。戻って働くことに問題がないかを主治医に訊いてみました。主治医は前と同じ働き方をすれば必ず心臓か脳に障害がでると言われました。過労死になっても不思議ではないと。このような身体では勤まらないと確定されたものと思います。ありがたいお誘いをいただいたのに本当に申し訳ありません」

主治医に訊いたというのは方便だ。あくまでも自分は戻りたかったという気持ちを見せて深く頭を下げ続けた。

上司からの返事はいくら待っても返ってこなかった。一分以上経ってから頭をあげて、踵を返して企画室を後にした。その足で総務部に行き退職願を提出した。追い出し部屋に入った社員が退職するのは想定内のことなので、担当者は何枚かの用紙を取り出し、記入を求めた。有給消化があるから出社するのは退職日まで十日間でいいそうだ。これで十年余りの仕事が終わりととなった。一仁が部屋を出て行くとしたら、総務課の部長らしき人が席から立ってやってきた。「体さえ壊さなければ、君は会社を支える屋台骨になっていたのにな。本当に残念だ」と言ってもらった。

出社最終日に企画部に挨拶に行った。尾崎は何か言いたそうだったが結局何も言わなかった。夕夏はまた企画部の部屋にいなかった。会社を辞めていれば結婚式に誘われる心配もないだろう。もう会うこともないのだ。

C S部の部屋に戻り、荷物の片付けをしていると窓の外の街路樹が大きく揺らいだ。知らぬ間に全体が赤々と燃えるような色に変わっていた。木の名前がタイワンフウと分かり、いまこうして紅葉を見ることができてよかった。窓を開けてしばらく眺めていると、また白黒のカラスのような鳥が枝に留まっていることに気づいた。とたんに、気分が浮き浮きしてくる。前もそうだったなと思い出した。いったいお前は何の化身なんだと、少し大きな声で呼びかけた。キヨ、キヨ、キヨと返事をしてきた。その囀りは洞窟の中で音が反響しているみたいに波紋を広げるのだった。

駅前の舗道にはずらつと新年用の売出しをする屋台が並び、街は師走の賑わい一色だ。一仁はリュックに必要な物を入れて、作業場のあるビルに向かって歩いている。有給消化で会社に行かなくなって、スーツはクローゼットに仕舞い込んだままに。その代わりに学生時代に來ていたカジュアルな服をタンスから取り出してテツさんの作業場に行くときに着回している。学生時代に舞い戻ったみたいに一仁は陶芸を学んでいる。自習として家に土を持ち帰り午前中は菊練りの練習をする。それだけでは物足りないので手回しろくろとカメラ板、陶芸の本を買って、茶碗や湯呑みを作っている。ようやく、作業場でする土練りとタタラ作りはひとりで出来るようになった。いまはポタリーケースの成形を教えてもらっているところだ。

ガス窯は作陶とは違って、窯の中に効率よくポタリーケースを入れることと、火を入れてからの温度管理が重要な作業だと分かった。テツさん曰く、素焼きの次の本焼きの行程が最終段階だそう。今日は、それを教えてもらえるのだが本焼きは素焼きより長時間かけて焼くため、泊まりがけになると言われていたので洗面用具や着替えを持ってきている。

十一時ちように作業場に着いた。作業は十二時からだが、自主的に一時間前に来て掃除をしている。最近になって、床を箒で掃き清めているとこの作業場の匂いがしているように思うのだ。その匂いとは古い建物の壁に染み付いたような、この場の空気とでもいうのか。しかし、しつかり確認しようと深く空気を吸い込むと匂いがしないので、幻臭とでもいうのだろうか。

十二時少し前に、テツさんが作業場に入ってきた。今日はいつもの紺の作業衣ではなく神職が着るような白作業衣でやって来た。本焼きというのは、それほど神聖な作業だったのかと、一仁のいつものジャージ姿を咎められるのではないかと心配になった。

「テツさん、僕のこの服ではダメでしょうか？　ダメだったら、今から作業衣を買ってきます

す」

一仁は無知であったことを詫びた。

「なんでそんなことを言う？　いつもの服装でいいに決まってるよ。あ、そうか、わたしの白作業衣を見たからか？　気にしなくなっちゃいい。これは自分の習慣みたいなもんだから」

テツさんにそう言ってもらえて、ほっとした。

「それじゃ、まず釉薬をかけるところから始めるぞ」

ストック置き場から持ち出した大きなバケツにどろりとした液体を注ぎ入れた。これは透明釉、これが攪拌機と、説明をしながら液体の中に攪拌機を入れてスイッチを押した。釉薬は粉なのでこれを水と混ぜ合わせて三日ほど寝かす、それがこの液体なのだ。テツさんが素焼きのポタリーケースをしつかり片手で持ちバケツの中に漬け込んだ。バケツから取り出し、手を回して全体に液が付いているか確認し、もう一方の手で柄杓を持ち、釉薬を掬い、付け残しの部分に掛けた。

次は一仁がやってみた。見ているときは、そんなに難しいことはないと思っていたのに、テツさんのように一回で全体に釉薬を掛けることができなかった。片手で持つことすら満足にできず、何度もやり直していると液がポタリーケースの表面に分厚く貼りついてしまった。

全部に釉薬を掛け終わると、乾くまでしばらく置いておく。テツさんが二〇個あった素焼きのポタリーケースのうち十五個を、一仁が五個を釉掛けした。

「カズの掛けたポタリーケースは乾いてから少し落としたほうがいいな。厚すぎると剥がれたりひび割れたりするから」

窯に入れるとき底に付いた釉薬を取っておかなければ、台に引っ付いてしまうのだとい、一つ一つの乾いたポタリーケースの裏を処理し、最後に撥水剤を塗っていった。

ガス窯の前にテツさんが立ち、一仁が釉掛けしたポタリーケースをテツさんに手渡し、それを窯の中の石板の上に置いていく。全部入れ終わると、扉の前にレンガを積み、温度計のコードをガス窯の上方にセットして扉を閉じた。ガス窯に火をつけると、ゆっくり温度を上げていく。素焼きの時と違い、本焼きでは一二〇〇度位まで上げるのだそう。いつきに温度を上げてダメで一時間に一〇〇度ずつとして、十二時間はかかる。

時間は夕方四時を回っていた。テツさんが作業場を出て行ったので一仁はコンロに薬缶を載せ、ゲンノシヨウコウを煎じ始めた。ガス窯から空気の流れる音が響いてくる。窯の上には煙突があり、この作業場の一番奥はビル本体の外側になるようで煙突の隙間から光が漏れている。

ガス窯の後ろはどうなっているのか、一仁は初めて回り込んで見てみた。そこには作業場の入口と全く同じ大きさだが相当に古ぼけた鉄の扉があった。

「何？　もう一つスペースがあるということなのか？」

中を覗こうとドアに手をかけたが、ここにも鍵穴があり、鍵がかかっていた。

表に戻ろうと振り返ると、すぐ後ろにテツさんが立っていた。顔つきがこれまでとまった

く違っている。一仁は自分が何かやらしたのではないかと焦った。しかし、謝るにも何が悪かったのか分からないので、テツさんから言ってもらうのを待つしかなかった。

棒立ちの状態で長い時間が過ぎたように感じた。もう待っておれないと判断し、

「テツさん、僕、何か間違いをしましたか？」と尋ねた。すると、

「ようやく次の段階に来たんだなあと、感慨深い気持ちになってたんだよ」

〈次の段階？〉

何の話をしているのかさっぱり分からなかったが、怒っているのではない。まだ禅問答のようなやり取りが続くものと思っていると、テツさんが一仁を通り過ぎ、第二の鉄の扉の前に立った。白作務衣の内側からキーチェーンを取り出し、鍵穴に鍵を差しこんだ。開錠の音は深い枯れ井戸の中に石を落としたような籠もった響きがした。扉にはドアノブではなく船の舵輪のようなものが付いていて、テツさんはそれを回した。今度はキーという高い音がした。扉は重くテツさんが両手を突いて奥へ押し込んだ。それでも人ひとりが通れるほどの隙間しか開かず、テツさんはすり抜けるように入って行った。

何も言われなかったが、これは後に続けということだと思い、一仁も扉の中に入った。暗闇でテツさんの姿も見えない。ただ空気がゆつくりと循環している感覚だけがある。しばらくすると作業場から、もれ入った僅かな光でテツさんの輪郭が見えるようになった。テツさんの後ろに付くと「わたしの作務衣の端を掴め」とだけ言われた。一〇歩も進むともう光は届かなくなり、目を開けても閉じても真っ暗だった。

ざつ、ざつと手を壁に滑らす音だけが続く。この感じを昔どこかで経験したことがあったと思った。

あ、そうだ。中学の林間学校の時だった。寺の本堂の地下にお祀りされている本尊まで行く〈戒壇巡り〉とそっくりだ。

一仁がそう思ったとき自分の変化に気づいた。

「テ、テツさん、僕、線香の香りがしているんです。しっかり鼻が利いているんです」

テツさんは二度ほど咳払いをして、

「そうか。線香の香りがしたか」

〈え、違うのか？ これも幻臭？〉

「この香りはパロサントといって香木を燃やした匂いだ。ここには大量に買って置いてある。そのままでもほんのりとした甘く木の香りがするが、行事のときは灯りにも使う。その時に煙が出る状態でここの中を浄化し香りを広げる」

間違はなく鼻が利いている。本当にしているのだ。一仁は作務衣の端を持っていない方の手を鼻に近づけた。その手からは先ほどハンドソープで手を洗った残り香がした。鼻に乗せていた手指に水滴が当たった。天井から雨漏りでもしているのかと思ったが、それは一仁の目から落ちていた涙だった。

嗅覚がないことに慣れて、自分ではそんなに困っているつもりはなかったのに、匂いがすることがこれほどまでに嬉しいことなのか。感動の気持ちはどんどん膨れていった。これま

で自分と自分の身体の関係は（気の利かない友だち）のようなものだとは半ば諦めていた。だからこのように望みを叶えてくれると心からありがとうと思えるのだろう。

鼻を何度も吸っている、もしかしたら、また匂いがなくなるのではと、ハンドソープの手を鼻に近づけて確認することを繰り返した。

テツさんが立ち止まった。一仁も同じく止まる。ここでもやはり空気の循環が感じられる。さつきテツさんが言った何とかという香木の香りもちゃんとしている。テツさんが「ほら」と肩を揺する。気づかなかったが自分はずっと目を閉じていたのだ。はつとして、目を開けると、周囲が弱い光によつて浮き出ているではないか。ここはもう通路ではなく、空間だった。光の出所は極小の豆電球で地面と壁面の角々に常夜灯のように取り付けられていた。

「あつ」

一仁は思わずテツさんの作務衣を引っ張ってしまった。それは壁一面に白い頭蓋骨が貼っているように見えたからだだった。

体が震えてきて、作務衣を持った手が硬直したように力が抜けない。テツさんが何度も振り動くがどうすることもできない。

テツさんは一仁の手を作務衣から外すと、無言のまま動きだした。最初の行動は壁に取り付けてあるトーチに火を点けることだった。それが点け終わると、この空間の広さがはつきりと見渡せた。円形テントの中に居る感覚でモンゴルの遊牧民の住居のゲルを思い出した。広さも畳にして二〇畳くらいはあるだろう。よく見ると頭蓋骨に見えていたのは白い土の塊でそれが入っているのがポタリーケースだった。石壁の前にびつしりとポタリーケースが天井に届くくらいまで重ねられている。

呆然と立ち尽くす一仁と対照的にテツさんは、中央に置いてある腰高のかがり火松明用の鉄かごの中にも木片を入れて火を点けた。やがてしつかりと匂いが充満されてきた。これがさつき聞いた香木なのだと思った。息をすることに匂いがしつかりと鼻孔を昇っていく。「ポタリーケースについて、これから話をする」

どんと地面に腰を下ろし座禅を組んだ。一仁も同じように腰を下ろした。座禅を組み終えるとテツさんはすぐに話し始めた。

「ここは戦時中に防空壕として使われたらしいが地下道自体は江戸時代にできた墓の跡地だったらしい。わたしの親父がこのビルを買ったのは昭和四〇年頃で、まだ辺りには戦争の傷跡が残っていた。親父は六〇歳だったがここで新しい商売を始めた。それなりに業績が出て、結果ここをわたしが受け継いだ。でも、ひとり息子だった訳じゃない。兄姉は六人いたが、わたしが生まれたときには姉さん二人はいたが、兄さんたちは若くして亡くなったりして男は誰もいなかった。わたしは昭和二〇年生まれで両親は四〇歳をとうに過ぎていて、母親もまさか妊娠しているとは思わなかったらしい。気づいたときには墮すこともできないほど日数が経っていたんだそうだ。

兄の中でも次男の兄さんは特攻隊で亡くなった。戦争で命を落とすことは覚悟していると言つてたらしいが、もし生きて帰れたら、株をやつて親父の仇を取るんだって。

仇を取るって、どういうことかって母親に尋ねた。そのとき、初めてうちの家業の話を聞かされた。親父は呉服屋を営む商人だったそうで、住まいも庭のある大きな家だったそうだ。呉服屋は母親にさせて、自分は親戚や友人らを集めて小豆相場を張っていたらしいんだが、大負けし、親戚たちから金を回収されて家も何もかも失った。

無一文になった親父は家族を養うため、浜の掘っ立て小屋に移り住んで塩田で塩を取る仕事をした。そこでわたしが生まれたんだ。幼いころの記憶は浜でひとり遊びをしていたこととか、塩田作業をしているおっさんたちの所に行っては、ちよっかいをかけて相手をしてもらったことかな。少しお金が貯まると塩田は止めて町に引越した。そこでは製麺工場で働いた。多分その頃、次男の兄は亡くなったのだと思う。記憶の中の親父は頻繁に家の前に立っている姿だった。これも後で知ったのだけど、そこで親父は戦没者の遺族が受け取れる年金に関する郵便物を待っていたんだ。

親父から息子の死を悲しむ様子はなかった。その年金で自分や家族の生活や商売のことばかり考えてるのがわたしは厭だったんだ。息子よりお金がそんなに大事なんかと思った。そりゃ、この世の中は生きている者の場所ではあると思うけど、亡くなった人は消えるんじゃない。変わることなく存在するはずなんだって、わたしは思ってたんだ。だから、親父が七〇歳くらいのとき、ビル管理の仕事を手伝えと言われたんだけど拒み続けた。

三〇歳には家を出ていたし、親父に手伝えと言われたときには、陶芸家の登竜門となる陶芸賞を獲得していた。陶芸家として生きていくと宣言したんだ。物作りをしているときは、この世の中からエスケープできるからよかったんだ。それでも親父はしつこく戻ってこいと言ってきた。最後には仕事はしなくていいから、ビルの地下の倉庫を陶芸工房に使わせてやるからと妥協案をだされたのが戻るきっかけだった」

テツさん越しに香木の赤い炎と白い煙が見える。真っ直ぐに立ち登っていると思えば、すつと横に流れるときがある。この空間を循環する空気の行方がそれによって分かる。香木の香りは益々濃ゆくなっている。なんだかとてもなく活力が漲ってきた。

この場所をしっかりと目に焼き付けようと、立ち上がりゆっくり歩き出した。この空間は通路であるトンネルよりも天井が高い。壁面は石や岩が埋まり込んでいて、壁の色は黄土色と灰色とが混ざっている。地面も同じ、天井も同じ質感だ。

積み上げられたポタリーケースの前に立った。その中に入れ込んである白いものは、やはり骨みたいだが頭蓋骨自体は入っていなかった。白い粘土に骨を混ぜ込んで丸めているせいでそう見えたのだろう。テツさんはここに地下墓地を復活させるつもりなんだろうか？改めてポタリーケースが重なり立ち並ぶこの情景が死者たちの住むマンション群のように思える。そしてなによりも不思議なのは、気味悪さをまったく感じないこと、いつまでも居続けられることだった。

「どうだ。これでポタリーケースを作っている理由が分かっただろう。ここを知っても仕事を続けてくれるかな？」

一仁はかがり火の炎を背負ったテツさんの方に向き直り、深く頷いた。

「ここを地下墓地にして残骨の供養をされているんですか？」

さつき思ったことを尋ねた。

「うん、それはわたしが手掛けたことのひとつではある。けれどこの場所は生者と死者が繋がる場所にしかつたんだ。自分ではここを《時の轍》と名付けている。時間と共に積み重ねられていく人生の道筋や経験の軌跡のことで、車が通った後にできる轍を人生の歩みに例えた。過去から現在、さらに未来へ続いていく場所として。もつと簡単に言うタイムマシンを創りたいんだ」

タイムマシン？ 突拍子もないことを言うと思った。

「質問いいですか？」

かがり火の傍に行き、もう一度テツさんの前に腰を下ろした。

「僕にはテツさんが陶芸工房を持てるから、お父様の申し出を受けられたとは思えないんです。お父様はこの地下墓地の存在を知ったうえで誘われたのでしょうか？」

「いや、親父は知らなかった。亡くなるまでな……。今は知ってるけどな」

「えっ、それどういう意味ですか」

「カズの言ったように、親父の誘いに応えるつもりはなかった。直接、会ってから断ろうと思ったんだ。親父はこの作業場にわたしを連れてきて、すぐ仕事に戻っていき、ひとり残された。これまで一度も使つてなかったようで、倉庫の中は何もない伽藍洞だった。内壁はおそらく、ビルが建てられた当時のままで壁は赤レンガ造りで床はごつごつとした石が敷かれていた。

突き当たりのこの地下通路の入口に当たる場所は同じ赤レンガだけれど、真ん中がアーチ型にデザインされていて、まさにダンジョンみたいだった。もともと古い物に興味があったのでそこを刺激され、真剣に観察し始めたんだ。突き当たりのアーチはドアの取っ手もないので、やっぱりデザインなんだと通り過ぎようとした。その時、赤レンガの一つが壁から外れているのが見えたので覗き込んでみると鉄板が見えたんだ。これは鉄の扉だと直感して、どうしてもその鉄板の向こうが見たくなかった。それがここに居残ることになった理由だ」

「赤レンガを取り除いたんですか？」

「全部は無理だった。アーチの所だけ取り外して、他は上から漆喰を塗り込んだ。その作業はひとりでやったよ。特にアーチの赤レンガを外すのは力がいった。ハンマーとボールで打ち砕いた。

鉄板の全容が現れたときは興奮が抑えきれなかった。なぜかと言うと、扉の所に鍵が貼り付けられていたからなんだ。赤レンガでここから先を閉じてしまった人がいつかまた開かれるときがくるという気持ちで鍵を分かりやすい場所に取り付けたとは思えなかった。すぐさま鍵を取って鉄の扉を開いたよ。今よりもつと扉は開けづらくて、やっと通り抜けるだけの幅を開くと地下通路になっているじゃないかって、さらに気持ちは高まったよ。怖さ知らずというんだろうな、わたしは懐中電灯だけ持って入っていった。

最初に今いるこの場所に辿り着いたときは、墓の跡とは気づかなかった。それから毎日、

作業倉庫の改裝作業の合間に懷中電灯だけ持って冒険よろしく歩き回った。ほら、この先にまだ地下通路があるだろう。そこにも行ったがすぐに行き止まりになっている。

ビルの前の神社に〈抜け穴〉があるのは知っているか？ それはあっちの城に通じる地下道ともいわれてるんだが、真偽のほどは不明で、この地下通路もそうなのかと思ったこともあった。それから、何十回も地下通路を探索しているうちに、この場所が墓跡と示す崩れた墓石を見つけた。掘り返してみると、骨が出てくる出てくる。何はともあれ、まずポタリ―ケースを作って骨を納めてあげようと思った」

「骨を見つけた時、恐怖はなかったんですか？」

「ない。これが自分の天職なんだと思った。わたしは陶芸を志したのも縄文土器や土偶が好きだったからだしな。けど、縄文時代のことは陶芸をするまで何も知らなかったけど。

いまやっているのは〈再葬〉といって、一度埋葬した遺骨を掘り起こし、甕なんかの容器に入れて再埋葬する風習があるのを知ってやったんだ。要は祖先を祀るんだ」

なるほど、ポタリ―ケースは祀るものだ。

「じゃ、戻ろう。窯の温度もだいぶ上がっているから、ここからは微調整も必要になる。それに弁当も食べないとな」

「ちよつと待ってください。この場所を〈時の轍〉と名付けたって言うておられました。タイムマシンを創りたいと。それは創れたんですか？ それにお父様は亡くなるまでこの存在は知らなかったけれど、今は知っているとおっしゃった。その質問のお答えももらっていません」

テツさんは立ち上がって、かがり火とトーチの火の前で動かなくなった。少ししてから、行き止まりだと言っていた地下通路に入って行き、水の入ったバケツを持って出てきた。

「わかった。カズはここに残りなさい。わたしは窯焼きの様子を見に帰るから」

「僕は残るんですか？」

「そうだよ。なぜ親父が亡くなつてから、この存在を知ったかだったり、ここがタイムマシンになつていることを認識しているのはわたしだけだ。これは話して伝えることじゃないんだ。カズが共鳴しないかぎり、ここは地下墓地の再葬墓でしかないんだよ。三〇分。さっきのように座禅を組んで瞑想してみなさい。それが終わったら、かがり火とトーチの火をここで消してほしい。豆電球は点けたままでいいから」

テツさんはそう言うと言つて行った。

ひとりになると香木の匂いが深みを増し、さらに一仁の周りを包みこんだ。改めて鼻から大きく息を吸い込み、ゆっくりと鼻から吐き出した。地下墓地のようなところに恐怖心がないのはきつと匂いが戻ってきた場所だからだと思う。目を瞑る前にトーチやかがり火松明の方を見た。炎のあがった木片はあと少しで燃え尽きようとしている。

さっきと同じ所に腰を下ろし座禅を組んだ。右手のひらを左足の上に置き、その上に左手のひらを重ね、見様見真似で印を結んだ。息を整えて目を瞑った。瞑想と言われたがどうすればその状態になるのか分からない。仕方がないので頭の中で〈無念無想〉と繰り返し唱え

続けることにした。

しばらくすると、頭の中で知らない景色が見えてきた。それは例えると小説を読みながら思い描いた景色のようで、のちにその景色は自分の中だけの記憶の景色になるみたいな感じだった。不可思議だったのはその景色がスライドショーのように入れ替わることとスピードの速さだった。やがてスライドショーのような動きは止まり、瞑った瞼の中で思い出す限りの亡くなった人の顔が浮かんでは消えていく。これも不思議な現象で自分はもうひとりいて、外から自分と亡くなった人を眺めているのだ。

ガタンと物音がした。それに起こされる形で一仁は目を開けた。眠っていたのか。自分ではずっと起きているかと思っていたが明らかに寝起きのような感覚だった。三〇分と言われたが携帯も時計も持っていないのでどれだけ経ったのか分からない。トーチや松明の火は消えて、豆電球だけの薄暗さだった。

立ち上がり、バケツの中に黒くなった木片を入れた。

帰りは壁に手を添えて歩いた。鉄の扉まで辿り着くと、テツさんが鉄の扉の前にいた。

「すみません。時計を持ってなかったので三〇分経ったのか、まだなのか分かりませんでした。帰ってきてよかったですか？」

「大丈夫だ。三〇分は過ぎてたけどな」

テツさんは気にしなくてもいいと手を横に振った。

「それより、弁当食べよう」

作業テーブルの上にはいつものお店の弁当が置かれている。

一仁はテツさんの向かいの椅子に座った。弁当の蓋を開けると、ふわりと焼き魚の香りが出た。口に入れると鼻の奥からも匂いが立ち上がってくる。今度はコップに入ったゲンノシヨウコウを飲んでみようと思ち上げた。ひと口飲むと苦味は感じなかったが独特の味がした。テツさんが言っていたようにそんなに香りが強い薬草茶ではない。

「匂いがします」

独り言のように言った。テツさんの方を見ると、いつもより食欲があるのか黙々と口に運んでいる。一仁は何げなく壁掛け時計の時間を見た。九時だった。そのことに驚き、咽てしまった。

「大丈夫か」

テツさんが言った。

「テツさん、僕はあそこに何時間いたんですか？」

「三時間かな」

テツさんは早くも弁当を食べ終え、コップのゲンノシヨウコウを一気飲みした。

「それじゃあ、カズの質問に答えよう。あの場所で瞑想をすると、思った人、思った場所に行けるようになった。もちろん映画みたいに実際に行くんじゃないで、頭の中での話として聞いてほしい。ある日、親父のことを思ったとき、親父から言われたんだ。へこの場所を清めてくれてありがとう」ってな。こっちは何も話せない。でも死んでからも親父はこの場所

にいるという実感は持てた。それで次は自分の中で気になっていた次男の兄さんのことを思ってみた。会ったこともない人だから声も知らないし、実物と写真では違いもあるだろうし。そして草原のようなどころで兄さんが立っている情景が見えた。どこからか子犬が現れて兄さんと遊びだした。兄さんは嬉しそうに笑ってた。十八歳の兄さんのことを彼の記憶のような形で想像できた。このときは兄さんは話さなかったけれど、兄さんがちゃんと存在していたんだという確信が持てた。その後も、次々に会ったことのない兄さんたちのことを考えてみた。赤ちゃんの時に亡くなった兄さんには写真もなかったが想像の中で若い頃のお袋が赤ちゃんを抱いていた様子が浮かんだ。

それ以来、亡くなった人のことを考えると必ずその人が想像の中に登場するようになった。それがわたしのタイムトラベルだと思っている。それから夢見とタイムトラベルに自分の時間の大半を使っている」

テツさんは肉親だけでなく、できるかぎり知人友人、生活の中でちよつとしたふれ合いのあった人たちのことを考えることがライフワークなのだと言い切った。父親の所有するビルの地下倉庫に陶芸工房を作って入ったのは、自分がここを受け継がなければ、人手に渡ってしまう。それでは地下通路のあの場所のことは消されてしまう。それを防ぐための誰からの導きだったのだと。今回、一仁と親しくなりたかったのは次男の兄によく似ているからだったとも言った。

「会ったこともないのに懐かしかったんだ」とテツさんは笑った。

話が終わった。

一仁は自分があの場所で体験したことを話そうかと思ったが、似たようなことを言うのと迎合していると思われそうで躊躇したし、また疑問に思うこともあったので、

「質問に答えていただいたのに、また質問してもいいですか？」と言った。

「いいよ」

テツさんは嫌がる様子もなく受けてくれた。

「なぜ亡くなった人のことを考えることをライフワークにされたのですか？」

「戒めにだよ、人間への。自分はひとりで生きているわけじゃないって再確認するための。いま生きている世界が自然に出来上がったわけじゃないってことを。自分の前に生きている人が社会を形成し守り戦ったわけだろう。その名も知らない先人のことを考えることが落葉のごとく積み重なった《時の轍》を受け取ることになるんだ。偉人だけでこの世界を創ったんじゃないって証に」

一仁はすぐに何も言えなかった。テツさんの言っていることが分からなかったからではない。過去から未来へ続く《時の轍》と想像すると、今の事しか考えていなかった自分の軽薄さに負い目を感じたのだ。その様子が落ち込んだように見えたのだろうか。

「あとはわたしが作業しておく。窯出しは明後日になるから明日は休んでいいよ」

テツさんから今日は帰りなさいと言われた。

一仁は終電で帰宅した。身体なのか頭なのか、とにかく疲れているので風呂に浸かるのはやめて寝室に直行した。ベッドに入っても神経が昂っているのか眠れなかった。瞑想しているとき、本のページが風に吹かれてめくりゆくように場面が移り変わっていったの思い出した。もしかしたらあれが〈時の轍〉とテツさんが言うタイムトラベルなのではないか。生きている人間が決して見続けることのできない長い時間をあの場所にいれば体感できる。いつからどこから眠ったのか、一仁は夢の中で中学校の廊下にいた。授業が始まるので教室に入ると、明るい教室の中には誰もいない。授業は視聴覚室だったのかと慌てて出て行くうとする、教室の真ん中の席に中村君が座っている。

「中村君、視聴覚室だよ、行こう」と一仁が言うと、

「カッツン、思い出してくれてありがとう」と中村君が言った。

窯出しの日の朝、作業場の掃除をしているとテツさんが来た。

「おはよう。今日は焼きあがったポタリーケースを中に運んで、祀る作業をするからな」

そう言つてガス窯の扉を開けた。一仁も軍手をはめて、一体ずつ慎重にポタリーケースを取り出す。全部で十体あった。作業テーブルに置いたポタリーケースを今度は棚台に運ぶ。

「今日はふたりで六体分作業しようか。はいこれ」と言つて渡されたのは物凄く大きなボストンバックだった。

「それにポタリーケースを入れて。それから、今日は地下通路を歩くときは懐中電灯を点けていいからな」

テツさんは自分のボストンバックのなかに三体入れていく。一仁も同じようにボストンバックに三体入れて肩に掛けた。

懐中電灯を点けて地下通路の中を歩いていると、この前の漆黒の世界とは違いこれから炭鉱夫として穴を掘りに行くかのような気持ちになった。地下通路の石壁は民家の外装のような白っぽい塗料で塗り固められていたし、通路は曲がりくねっていた。灯りがあるので今回は、ものの数分で目的の場所に着いた。

テツさんはこの前と同じようにかがり火を点けた。同じ香りが空間に広がった。

「残骨はこつち」

呼ばれたのは行き止まりになっている地下通路だった。懐中電灯で中に入ると、左右の壁に幾つもの壁穴が開いていて、中に残骨が入っている。数えると一〇個は穴があり、そのの全部に残骨が埋まっている。

「まだまだ骨はたくさんありますね」

「そうだ。だからカズ頼むよ」

「わかりました。でもあそこはポタリーケースを置く場所がないのですか？」

かがり火松明が燃えている場所にポタリーケースを置けるスペースはなかった。六体積み重ねる構造になっている。

「次はこっちで作業することになる」

テツさんはトーチに火を点けながら言った。

一仁には地下壕の建設経過や使用状況の詳細は分からないが、ここが戦争末期に軍に使用されていたと聞いていたので中は鉄骨が入っていると考えてもいいだろう。残骨を取り出して壁を削り塗装をしても危険はないはずだ。奥の地下通路も天井までの高さは同じくらいだし、行き止まりの場所は円形テントのゲルのようになっているので同じ構造で作れるだろうと思った。

軍手をつけた手で壁穴から残骨を取り出す。ポタリーケースにも頭蓋骨がそのままの形で残っているものはなかったが、ここにも砕かれた残骨しかない。

テツさんが白い粘土の中に残骨を包み込みポタリーケースに入れていく。一体に五、六個ははいるようだ。自分も同じように白い粘土を伸ばしその中に残骨を包み入れた。

「骨を扱う時には、お祈りをする必要とかはないんですか？」

「香木を焼いて清めているから大丈夫」

三体ずつ残骨を納め終わった。

「こうしてモルタルでポタリーケースを接着させて積み上げる」

セメントと砂と水を混ぜて作った物を板に載せて渡された。

テツさんは地面と隣接する部分、ポタリーケースの後と上にモルタルを付けて押し付けるように置いた。六体のポタリーケースが天井近くの高さになった。

「よし」

テツさんは一仁を呼ぶと地下通路や円形テントのゲル状のスペースとは違う場所に連れて行った。そこには小さな井戸があり、水はモーターで汲み上げる設備になっていた。

「これも最初からあったんですか？」

一仁が訊くとテツさんはそうだと頷いた。

さらにその隣に道具類を収納する場所を教えられた。

片付けが終わると、ふたりしてかがり火の前に戻ってきた。

「今日は一緒に瞑想しよう」

テツさんはそういうとかがり火の前に腰を下ろし、胡坐を組んで目を閉じた。一仁も同じように座り、目を閉じる。

一仁はこの前のように無念無想と頭の中で唱えた。父親の母親であるお祖母さんのことを考えた。聞いたところによると、亡くなったのは栄養失調だったそうだ。戦時中ならばもありなんだが、一九六〇年代には「もはや戦後ではない」と使われた言葉どおり戦後の復興期が終わって、高度成長期に入ったところにそんなことになった。父親は四歳で霊柩車に乗せられた棺桶にしがみついて「行かないで」と泣いたのだそうだ。そこまで考えていると、一仁の中にきれいな顔の女性が浮かんできた。父親と写っている写真の祖母の顔だった。祖

母の名前は和子だったと思う。その女性の背景が浮かんできた。れんげ畑に何人もの子が
いる中に、祖母と思われる女性と父親と思われる幼い子どもがいた。これも古いアルバムに
残っていた写真のようだ。一仁は心の中で「お祖母さん、孫の一仁です」と名乗った。

次に母親の弟、叔父さんのことを考えた。彼には遊んでもらったことがあった。母親と仲
がよく、家に来るときには必ずシュークリームやドーナツを買ってきてくれた。オセロの相
手もしてくれた。叔父の名前は翔紀。背が高く顔の彫りが深くて日本人ぽくなかった。二十
七歳で肝臓癌を発症し、若いゆえに進行が早くて二十八歳で亡くなった。叔父さんの泳ぐ姿
が浮かんだ。家族旅行で海水浴に行ったときの記憶だ。泳ぎが得意でブイの浮かんでいると
ころを何往復もしたのだった。一仁の両親はまだ健在だが長らく疎遠であった。過去時間の
両親を思うことで大事な物を手にしたような気がした。

突然、外国の風景が浮かんできた。これは大学生の時に、沢木耕太郎の深夜特急を読んで、
いつか行こうと思っていた「地球の歩き方」のパリ編の記憶だ。深夜特急の本の中で、どこ
へ行くのも歩いて行つたと書いてあり、一人旅でパリを縦横無尽に歩きたいと思ったのだ。
モンパルナス墓地は著名な人の墓が多くある観光地だった。モンパルナス墓地のすぐ前
にカタコンブというところがある。一仁は写真でしか見たことのない「カタコンブ」が地下
深くに広がる地下墓地だったことを思い出した。本で見ただけの浅い記憶がいまこうして
浮かんできたのは、ここがまさに「カタコンブ」だったからだ。

ゆっくりと目を開いた。

テツさんは一仁が何を見てきたのか分かっているみたいに、満面の笑みを浮かべている。

「カズ、君はここに来た理由がわかったみたいだね」

「いまパリの〈カタコンブ〉を思い出したんです。モンパルナス墓地のことです。大学生
のときはなぜ墓地が観光地になるのか理解できなかったんですが、それはテツさんが言わ
れた〈死者のことを思う〉ことが原点じゃないかと思いました。ここを〈カタコンブ〉にす
ることがテツさんの望みなんです」

〈時の轍〉から作業場に戻ってきた。テツさんは先に帰り、一仁は作業テーブルを片付け火
の元を確かめると作業場の鍵を閉めて上にあがった。

外は空が赤焼けた夕方で穏やかな風が木の枝をさざめかせた。一仁の頭の中はこれから
の作業のことでもいいだった。〈カタコンブ〉にする目的は商売であってはいけない。け
れど、自己満足のためだけでも駄目だ。そう思っているとまた大学生のころの記憶が蘇った。
メキシコの伝統文化で〈死者の日〉というのがあった。しかもそれは祝祭としてで、亡くな
った家族に敬意を示す祭りだった。日本のお盆もそうなのかと思うが、骸骨のメイクをした
人で街中が溢れるメキシコとは形式が違い過ぎる。メイクのように人が飛びつくような物
で死者のことを忘れるというメッセージを作ってはどうかと考えるでいた。

広い通りに出ると、神社の木にあの白黒のガラスのような鳥が留まっているではないか。
まさか自分を追いかけてきたわけじゃないかなと思いつつ、しばらく鳥を眺めていた。

すると、この鳥を使って「死者の日」を模した〈カラフルな死者の鳥〉とかメモメント・モ

リをトリビュートしたヘメメント・トリンの名前で陶器のフィギュアを作っている自分の姿が鮮明に浮かんできたのだった。